広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「苦渋」な名文 : 北宋における樊宗師「絳守居園池記」の読まれ方
Author(s)	渡部, 雄之
Citation	中國中世文學研究 , 71 : 1 - 20
Issue Date	2018-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047680
Right	
Relation	

「苦渋」な名文―北宋における樊宗師「絳守居園池記」の読まれ方―

渡部雄之

はじめに

中唐の古文家樊宗師（七六六？～八二四）[1]の文章は、『唐国史補』巻下に「元和已後、爲文筆則學奇詭于韓愈、學苦澁于樊宗師。」（元和已後、文筆を爲せば則ち奇詭を韓愈に學び、苦澁を樊宗師に學ぶ。）とある[2]ように、元和（八〇六～八二〇）の頃、韓愈（七六八～八二四）の文章とともに多くの模倣者を生む程尊重されていた。『唐国史補』の言う「苦渋」は、下に述べるように、読解に難を生ずる程のぎこちなさを意味するようである。文章の「読みやすさ」を求めることよりも、韓愈の「奇詭」や樊宗師の「苦渋」の方が模倣の対象として選択されたこと自体が奇妙ではあるが、中唐古文の一側面をよく表しているとも言えるだろう。

韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」（『朱文公校昌黎先生集』巻三四）によると、樊宗師は生前厖大な作品を残したという[3]。『新唐書』芸文志には、巻五七・春秋類に『春秋集伝』十五巻、巻五九・雑家類に『魁紀公』『樊子』各三十巻、巻六〇・別集類に『樊宗師集』二百九十一巻が記録されており、宋の宮廷にはその著作がかなり収められていたことが分かる。だが一方で、本稿でも取り上げる宋初の人孫沖の「与晋守何亮書」に「疇昔嘗得樊生所爲『絳守居園池記』一篇、他文未嘗得見耳。」（疇昔嘗て樊生の爲る所の「絳守居園池記」一篇を得るも、他文未だ嘗て見るを得ざるのみ。）とあることからすれば、民間にはほとんど伝わっていなかったようである。さらに時代が下り元代になると、『宋史』巻二〇八「芸文志」別集類が『樊宗師集』一巻のみを記録するように、宮廷に伝わっていた右の諸書さえ失われてしまった。そして現存する作品は、わずか四篇（「絳守居園池記」「蜀綿州越王楼詩幷序」「樊浼墓志」「樊湊墓志」）のみである。樊宗師の著作の散佚は、晩唐五代、南北宋間の戦乱に遭遇したためでもあろうが、彼の作品そのものが、歴史の選択にさらされ、次第に人々から顧みられなくなったことも、大きな理由の一つであろう。

かように現在では寥々たるに過ぎない樊宗師の作品であるが、うち「絳守居園池記」一篇は、そのあまりの難読さゆえ、逆に歴代の文人たちの関心を引いてきた。例えば北宋の欧陽脩（一〇〇七～一〇七二）は、『集古録跋尾』巻九（『欧陽文忠公集』巻一四二）「唐樊宗師絳守居園池記」において「嗚呼、元和之際、文章之盛極矣、其怪奇至於如此。」（嗚呼、元和の際、文章の盛極にして、其の怪奇なること此くの如きに至る。）と述べ[4]南宋の陳振孫（一一八三？～一二六二？）は、『直斎書録解題』巻一六「別集類上」の『樊宗師集』『絳守園池記注』の解題で「讀之殆不可句。」（之を讀むに殆ど句すべからず。）と言い、また元末明初の陶宗儀（一三一六～？）は、『輟耕録』巻一二・園池記で「艱深奇澁、讀之往往昧其句讀。況義乎哉。」（艱深奇澁にして、之を讀むに往往其の句讀を昧くす。況や義をや。）と記し、さらに後の清代では、『四庫全書総目提要』巻一五〇「集部」別集類三「絳守居園池記注」が「文僻澁、不可句讀。」（文　僻澁にして、句讀すべからず。）と評している。

「絳守居園池記」に関してとりわけ興味深いのは、右に引いた『輟耕録』が、陶宗儀が偶然手に入れた元の趙仁挙（生没年不詳）による箋注本を紹介し、その本の句読を反映した全文を掲げていることである。また趙仁挙と同時代の呉師道（一二八三～一三四四）や許謙（一二七〇～一三三七）は、趙の施した注に補正を加えており、明代の趙師尹（一五八〇～一六一五頃）、沈裕（生没年不詳）、清代の胡世安（一五九二～一六六三）、孫之騄（生没年不詳）、張庚（一六八一～一七五六）、張子特（生没年不詳）等も、同じく「絳守居園池記」に注や句読を施している。さらには現代の学者も、彼らの成果を踏まえつつ、新たに注釈や翻訳の作業を行っている[5]。今日では「絳守居園池記」を優れた文章として評価する研究はほとんど見当たらない。むしろ韓愈が主張した「怪」や「奇」を過度に反映した作品として、否定的に扱う場合の方が多い。

ただ、「絳守居園池記」に注釈や句読を施すという行為は、見方を変えれば、大変難読な文章であるにも関わらず、これを何とかして読み解こうとする積極的姿勢の表れとも取れる。だとするならば、歴代の文人は樊宗師の作品を、単純に否定し去ろうとしただけではないのではないか。先に引いた『唐国史補』や孫沖「与晋守何亮書」の記述からすれば、樊宗師の作品が人々に顧みられなくなったのは、中唐の元和以降から北宋初期にかけて、晩唐、五代の間ということになる。本稿では、現在確認できる中で最も早くに作られた「絳守居園池記」の注釈である、孫沖「重刊絳守居園池記序」（『山右石刻叢編』巻一一）を中心に、北宋期における「絳守居園池記」の読まれ方及び本作品に対する評価について考察を行う。

一　「文者道之車輿也」
―古文家孫沖と彼の古文観について―

孫沖、字は升伯、趙州平棘（現在の河北省趙県）の人。生没年は不明だが、『続資治通鑑長編』の彼に関わる記事の年代が、上は大中祥符五年（一〇一二）、下は景祐三年

（一〇三六）であることから、およそ太宗朝の終わり頃から仁宗朝の中頃にかけて生きた人物と思われる。現存する作品は、文七篇（『全宋文』）、詩四首（『全宋詩』）と、あまり多くない。「重刊絳守居園池記序」は、彼が官僚となってほどなくしてから務めた絳州（現在の山西省新絳県一帯）通判（副知事）の在任中、景德元年（一〇〇四、景德は真宗の年号）に作られた文章である。執筆のきっかけは、絳州に置かれていた「絳守居園池記」の碑文が、長い年月を経て朽ちかけていたのを、当州の知事耿説（生没年不詳）が惜しみ、改めて石に彫り直すよう命じたことである。孫沖は序文の中で、韓愈の死後、その考えが後の者に正しく継承されなかったために、古文が次第に衰退し、ついには弊害をも生じたことを述べた後、宋代における例として、陳堯佐（九六三～一〇四四）に関する話を取り上げる。

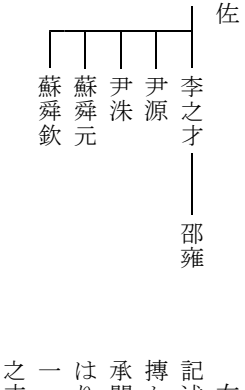
嘗有人以文投陳堯佐。陳得之竟月不能讀、卽召之、俾篇篇口說、然後識其句讀。陳以書謝且戲曰、「子之道、半在文、半在身。」以爲其人在則其文行。蓋謂既成文而須口說之也。是知身死則文隨而沒矣。於學古也何有哉。

嘗て人の文を以て陳堯佐に投ずる有り。陳　之を得て竟月なるも讀む能はず、卽ち之を召して、篇篇口說せしめ、然る後其の句讀を識る。陳　書を以て謝し且つ戲れて曰く、「子の道、半ばは文に在り、半ばは身に在り」と。以爲（おも）へらく其の人在れば則ち其の文行はると。蓋し既に文を成して須く之を口說すべきを謂ふなり。是れ身死すれば則ち文隨ひて沒するを知る。古を學ぶに於いてや何か有らんや。

陳堯佐は、作者自身が声に出して読み上げなければ句読も分からない文章では、後世に伝えることができないと述べて、そうした難解な文章を批判した。陳堯佐は、後の景祐年間（一〇三四～一〇三八）に宰相を務めた大物の政治家であり、また詩人としても名を知られていた他、その神道碑（欧陽脩「太子太師致仕贈司空兼侍中文惠陳公神道碑銘」、『居士集』巻二〇、『欧陽文忠公集』巻二〇）に「多慕韓愈爲文」（多く韓愈を慕ひて文を爲（つく）る）とあるように、古文家の一人でもあった。

『宋史』巻二八四の本伝に「［陳堯佐］初肄業錦屏山、後從种放於終南山。……陳摶嘗謂其父曰、『君三子皆當將相。惟中子貴且壽。』後如摶言。」（初め錦屏山に肄業し、後　种放に終南山に從ふ。……陳摶嘗て其の父に謂ひて曰く、「君の三子　皆當に將相たるべし。惟だ中子のみは貴くして且つ壽たらん」と。後　摶の言の如し。）とあるように、陳堯佐は北宋初期の道士陳摶（八七一？～九八九？）や种放（九五五～一〇一五）と繋がりがあった。陳摶と种放は、宋・朱震（一〇七二～一一三八）の「進周易表」によると、「先天図」を古文家の穆修（九七九～一〇三二）へと伝えた人物である（「濮上陳摶以『先天圖』

傳种放、放傳穆修、修傳李之才、之才傳邵雍。」（濮上の陳摶「先天圖」を以て种放に傳へ、放　穆修に傳へ、修　李之才に傳へ、之才　邵雍に傳ふ。）。穆修は、『東都事略』巻一一三「儒学伝」穆脩に「尹源與其弟洙始從之學古文、又傳其春秋學。」（尹源と其の弟洙始めて之に從ひて古文を學び、又た其の春秋學を傳ふ。）とあり、『宋史』巻四四二・穆脩伝に「［穆］脩於是時獨以古文稱、蘇舜欽兄弟多從之游。」（脩是の時に於いて獨り古文を以て稱へられ、蘇舜欽兄弟多く之に從ひて游ぶ。）とあるように、尹源（九九六～一〇四五）、尹洙（一〇〇一～一〇四七）兄弟や蘇舜元（一〇〇六～一〇五四）、蘇舜欽（一〇〇八～一〇四八）兄弟が師事した人物である。以上の師弟関係をまとめると、左図のようになる。



孫沖とこの系譜との繋がりについて探ってみると、右に見たように孫沖が陳堯佐の発言を引用している点の他に、蘇舜欽が自作の文章八十五篇と、自らの古文観を述べた書簡（「上孫沖諫議書」、『蘇学士文集』巻九）を孫沖に送っている点を挙げられる。書簡の制作年は、景祐三、四年（一〇三六、三七）頃と思われる[6]。『続資治通鑑長編』によると、孫沖は景祐三年に自撰の『五代紀』七十七巻を献上し、天子に表彰されている[7]。蘇舜欽は、先輩古文家であり、史家としての高い評価を得ていた孫沖の知遇を得ようとしたのであろう。孫沖に関する資料はそれ程多く残っていないため、はっきりとしたことは分からない。だが、以上のことから推測するに、彼は道士の陳摶に始まる右の思想的系譜に関わる人々に近い存在だったのではないだろうか。華麗な西崑派の美文が一世を風靡し、古文に志す者は人々からあざ笑われた（欧陽脩「蘇氏文集序」、『居士集』巻四一、『欧陽文忠公集』巻四一）当時において、古文家同士の結び付きは極めて重要だったはずである。

右に朱震の「進周易表」を引いたが、「先天図」がこの記述の通りに伝承されたかどうかは疑わしい。ただ、陳摶から邵雍に至るまでの人々の間に、何らかの思想的継承関係があった可能性はある。そしてその思想とは、やはり『易』に関わるものであっただろう。『宋史』巻四三一「儒林伝一」李之才には、「河南穆脩性卞嚴寡合、雖［李］之才亦頻在訶怒中。之才事之益謹、卒能受『易』。時蘇舜欽輩亦從脩學『易』、其專授受者惟之才爾。」（河南の穆脩　性　卞嚴にして合ふこと寡（すく）なく、之才と雖も亦た頻りに訶怒の中に在り。之才　之に事ふること益ます謹にして、卒に能く『易』を受く。時に蘇舜欽の輩も亦た脩

に從ひて『易』を學ぶも、其の專ら授受せらるる者は惟だ之才のみ。）と、李之才の他に蘇舜欽も、穆修から『易』を学んでいたことが記されており、少なくとも穆修以下の人々の間には、『易』に関わる思想の継承関係が存在したと考えられる。

北宋初期の古文が『易』と密接な関わりのあることは、副島一郎氏がすでに述べている[8]。副島氏によると、宋初に活躍した古文家のうち、王禹偁（九五四～一〇〇一）を中心とする雄健暢達な古文を作った人々に、『易』に対する強い関心が見られるという。一方で、この時期を代表するもう一つの古文家のグループ、即ち柳開（九四七～一〇〇〇）を中心とする晦渋古怪な文章を作っていた人々には、そうした特徴は見られない。陳摶から始まる系譜に属する人々は、その思想的継承関係が『易』によると思われること、また陳堯佐が難読な文章に反感を抱く人物であったこと等から、どちらかと言えば王禹偁のグループに近い文章観を持っていたと考えられる[9]。孫沖もまた、「重刊絳守居園池記序」の記述から、彼らに似た文章観を持っていたことが分かる。

嗚戲、文者道之車輿也。欲道之不泥、在文之中正。秦世以前、淳而不漓、炎漢之閒、煥而不雜。□魏與晉、稍稍侵害、自茲而下、驅（「毆」の誤りか。）而折脊。隋唐以來、擘爲二途、既不相近、頗甚攻毀。夫聖人文章、若八卦、象、繇、爻、象之體、雖不膚淺、然聖人之文、終能傳解。孔子繫辭、則皎然流暢。其『詩』『書』『禮』『樂』之文、披之皆可見意。是聖人於文章、本在達意垂法而已。不必須奇怪而難入也。由經書外、子史百家之言、固可通導、獨楊雄『太玄』準『易』而爲之、當時之人或不肯一覽。故文章在乎正而不雜、但如兩漢風骨、則仲尼、周公復出、固無所嫌也。

嗚戲、文は道の車輿なり。道の泥まざらんことを欲すれば、文の中正に在り。秦の世以前、淳にして漓からず、炎漢の閒、煥らかにして雜じらず。□魏と晉とに、稍稍侵害せられ、茲自り而下、驅られて脊を折らる。隋唐以來、擘かれて二途と爲り、既に相ひ近からず、頗る甚だ攻毀せらる。夫れ聖人の文章、八卦、象、繇、爻、象の體の若きは、膚淺ならずと雖も、然れども聖人の文なれば、終に能く傳解す。孔子の繫辭は、則ち皎然流暢たり。其れ『詩』『書』『禮』『樂』の文は、之を披けば皆　意を見るべし。是れ聖人の文章に於けるは、本　意を達し法を垂るるに在るのみ。必ずしも須く奇怪にして入り難かるべからざるなり。經書由り外、子史百家の言、固より通導すべきも、獨り楊雄の『太玄』のみ『易』に準へて之を爲り、當時の人或いは肯て一覽せず。故に文章は正にして雜ならざるに在り、但だ兩漢の風骨の如きのみは、則ち仲尼、周公復た出で、固より嫌ふ所無きなり。

孫沖は、「辞達而已矣」（『論語』衛霊公篇）という伝統的文学観とともに、所謂「載道」の文学観を示す。文は道に基づいて作られるべきであることは、すでに韓愈が述べているが、道を貨物、文をそれを載せる車に喩える言説は、北宋の思想家周敦頤（一〇一七～一〇七三）『通書』文辞の「文所以載道也。輪轅飾而人弗庸、徒飾也。況虛車乎。」（文は道を載する所以なり。輪轅　飾らるるも人庸ひずんば、徒飾なり。況んや虛車をや。）より始まるとされる。だが右の「重刊絳守居園池記序」の例から、宋初にすでにそうした表現がなされていたことが分かる。現存する作品が少ないこともあり、北宋初期における古文家たちとの関わりがあまりはっきりしていなかった孫沖であるが、実際は内容の伝達を第一とする文章観を有する人たちとある程度の繋がりを持っていたと推測できる。そうだとすると、「苦渋」と評された「絳守居園池記」を、彼が注釈を施してまで読み解こうとした動機や目的は何だったのだろうか。

二　「樊宗師爲皇唐名士」
―作者の樊宗師に対する孫沖の認識―

現存する孫沖の作品で樊宗師や彼の文章に言及するものは、「重刊絳守居園池記序」の他、「与晉守何亮書」がある。「重刊絳守居園池記序」の末尾には、「沖通治晉州時、嘗與晉守何公亮書、論樊宗師所爲文章。何以書答沖、剖析尤見爲文之深旨。」（沖　晉州を通治せし時、嘗て晉守何公亮に書を與へ、樊宗師の爲る所の文章を論ず。何　書を以て沖に答へ、剖析尤も文を爲るの深旨を見はす。）と書かれている。孫沖は、『宋史』巻二九九の本伝に「（孫沖）後舉進士、登甲科、授將作監丞、歷通判晉、絳、保州。」（後に進士に舉げられ、甲科に登り、將作監丞を授けられ、歷て晉、絳、保州に通判たり。）とあるように、絳州以前に晉州（現在の山西省臨汾市一帯）の通判を務めていた。その時、当地の知事であった何亮（生没年不詳）と、書簡によって互いに樊宗師の文を論じ合ったという。二人の書簡は、「重刊絳守居園池記序」の続きの一文に「其二書今亦刊之記後。」（其の二書　今亦た之を記の後に刊む。）とあるように、再刻された「絳守居園池記」とともに石に刻まれた。そして現在は、「絳守居園池記」「重刊絳守居園池記序」とともに、『山右石刻叢編』巻一一に収められている。ここでは両書簡を手掛かりに、孫沖が「絳守居園池記」を読み解こうとした動機について考えてみる。

まず、孫沖が何亮に送った書簡を見てみよう。

由韓愈氏之道、當時之人隨而變者衆矣。獨樊宗師益苦其詞、使人莫能解曉。疇昔嘗得樊生所爲「絳守居園池記」一篇、他文未嘗得見耳。自首至末、凡能通者、不過數句。沖負其文、區區十餘年、卒不逢能讀者。沖頗□□生未知其道、果宜如是邪。孔子曰、「周

監於二代、郁郁乎文哉。」文之如『周禮』、則使人易爲耳。苟如樊生、乃周公之道無以教人也。是樊生迂言吃句、獨取異於當時乎。不深思之邪。……夫樊生之文、自述而自訓則可矣。待其千百年有裨於世者、固無有哉。

韓愈氏の道に由りて、當時の人隨ひて變ずる者衆し。獨り樊宗師のみ益ます其の詞に苦しみ、人をして能く解曉する莫からしむ。疇昔嘗て樊生の爲る所の「絳守居園池記」一篇を得るも、他文未だ嘗て見るを得ざるのみ。首自り末に至るまで、凡そ能く通ずる者、數句に過ぎず。沖其の文を負ひ、區區たること十餘年なるも、卒に能く讀む者に逢はず。沖頗る□□生未だ其の道を知らず、果たして宜しく是くの如くなるべきか。孔子曰く、「周は二代に監み、郁郁乎として文なるかな」と。文の『周禮』の如きは、則ち人をして爲り易からしむるのみ。苟くも樊生の如ければ、乃ち周公の道以て人に教ふる無きなり。是れ樊生の迂言吃句は、獨り異を當時に取らんとするか。深くは之を思はざるか。……夫れ樊生の文、自ら述べて自ら訓ずれば則ち可なり。其れ千百年に世を裨くる者有るを待つも、固より有る無きかな。

孫沖は何亮に、「絳守居園池記」はあまりに読解が困難であると訴える。そして『周礼』の文と対比しつつ、樊宗師の作る文章では儒家の道を伝えることはできないと主張する。「夫れ樊生の文、自ら述べて自ら訓ずれば則ち可なり。其れ千百年に世を裨くる者有るを待つも、固より有る無きかな。」の部分は、前節で見た陳堯佐が発したことばの内容と重なる[10]。樊宗師の文章に対する孫沖の評価は、かようにかなり否定的であるのだが、注意せねばならないのは、孫沖の批判の矛先は、「絳守居園池記」の文辞の難解さにのみ向けられている点である。一方の内容に関しては、彼が十年余りも本作品の読解を試み続けていたことから、強い関心を抱いていたと思われる。

書簡を結ぶにあたり孫沖は、「沖不敏、敢以樊生之文爲請。望執事無惜剸析、俾後人知乎文章之指歸也。」（沖不敏にして、敢へて樊生の文を以て請を爲す。望む執事剸析を惜しむ無く、後人をして文章の指歸を知らしめんことを。）と、「絳守居園池記」の解釈及び樊宗師がかかる難解な文章を作った意図の説明を何亮に求めた。これに対し何亮は、返書（「答孫沖書」）の中で

今以紹述之文質諸周、孔『詩』『書』『易』『禮』『春秋』、而無一言髣髴於其閒、則是非昭昭矣。其文可廢、亦昭昭矣。周、孔而下、孟軻、楊雄爲大儒、而觀軻、雄之書、則煥若日星。獨『太玄』爲隱奥而深者、雖未能盡其義、必能通其詞。不若紹述之詞與義俱昧懞混沌、若覘鴻荒之野、榛棘草莽、不知其際也。

今　紹述の文を以て諸を周、孔の『詩』『書』『易』『禮』『春秋』に質すも、一言も其の閒に髣髴たる無

ければ、則ち是非昭昭たらん。其の文　廢すべきも、亦た昭昭たらん。周、孔而下、孟軻、楊雄を大儒と爲し、而して軻、雄の書は、則ち煥らかなること日星の若きを觀る。獨り『太玄』のみ隱奥にして深き者と爲し、未だ其の義を盡くす能はずと雖も、必ず能く其の詞に通ず。紹述の詞と義と俱に昧懞混沌として、鴻荒の野、榛棘たる草莽を覘ふが若く、其の際を知らざるが若きならざるなり。

と、樊宗師の文章はことばも意味もよく分からないため、捨て去ってしまうべきだと述べた。これだけを見れば単なる否定の文であるが、ただ作者の樊宗師に関し、次のような肯定的なことばも記した。

夫樊宗師紹述、蓋唐之儒臣而篤於文學者。故其著撰比諸儒爲多。其書有號『魁紀公』而下凡七十五卷、序、記、雜著又五百餘首、大率一言一句不與今古文相類。原紹述之意、必欲擺脱今古、自成一家、而不思誤後人之深也。

夫れ樊宗師紹述は、蓋し唐の儒臣にして文學に篤き者ならん。故に其の著撰　諸儒に比べて多しと爲す。其の書『魁紀公』と號づくるより而下凡そ七十五卷有り、序、記、雜著又た五百餘首、大率一言一句今古の文と相ひ類ず。紹述の意を原ぬれば、必ず今古を擺脱し、自ら一家を成さんことを欲するも、後人を誤るの深きを思はざるならん。

何亮は、樊宗師が当時の儒臣の中でも文学に専心した人物であると述べ、大量の作品を著した点や、独自性のある文章を作ろうと努めた姿勢は評価する。ただ、その独自性の追求が、「近世學文、有隱沒其旨、崎嶇其詞、俾人不得其句讀者、必曰比樊宗師猶爲聲律爾。」（近世　文を學ぶに、其の旨を隱沒し、其の詞を崎嶇ならしめ、人をして其の句讀を得ざらしむる者有れば、必ず樊宗師に比ぶれば猶ほ聲律を爲すのみと曰ふ。）という弊害を後世にもたらしたことを問題視するのである。同様の内容は、本書簡の別の箇所でも「嗚呼、紹述之於儒、其用心勤矣。而其文可廢也。不然、誤後人之無窮乎。」（嗚呼、紹述の儒に於けるや、其の心を用ふること勤む。而るに其の文　廢すべきなり。然らずんば、後人を誤まるの窮まる無きかな。）や「嗚呼、紹述之於儒、吾悲其用心之勤、而欲必廢其文、使無誤後人也。」（嗚呼、紹述之の儒に於けるや、吾其の心を用ふるの勤むるを悲しむも、必ず其の文を廢し、後人を誤まる無からしめんと欲するなり。）というふうに述べられている。「絳守居園池記」は、樊宗師が儒家の精神に基づき書いたもののはずであるが、残念なことに表現手段を誤っているため、読み手にそれを伝えることができないと嘆いている訳である。とはいえ、表現面の如何ともし難い欠点を非難しながら、作者の樊宗師を儒臣として評価することは、「絳守居園池記」に強い

関心を寄せる孫沖に対し、その意義をある程度認めたことにもなる。

何亮からの返書を受け取った後、孫沖は「重刊絳守居園池記序」の冒頭に次のように記した。

長慶中、樊宗師爲絳州刺史、嘗作「絳守居園池記」。其詞句甚隱僻、不明白。□在京師得此文、頗與同人商搉、卒不能果。然詳其意旨句讀、樊宗師又爲皇唐名士。

長慶中、樊宗師　絳州刺史爲(た)り、嘗て「絳守居園池記」を作る。其の詞句甚だ隱僻にして、明白ならず。□　京師に在りて此の文を得、頗る同人と商搉するも、卒に果たす能はず。然れども其の意旨句讀を詳らかにすれば、樊宗師は又た皇唐の名士と爲さん。

「絳守居園池記」のことばや文は、普通とかなり違っていてよく分からないが、作品の中身や句読をはっきりさせられれば、作者の樊宗師は唐代の名士と看做すことができようと言う。作者の人物に対する肯定的評価、作品の表現に対する難読という否定的評価、この二つの間に立って発されたことばであるが故に、右の記述はいささか奇妙に感じられるものとなっているのであろう。

これに続けて孫沖は、「不知當時負此文走人門下、有誰與詳解而知之也。」（知らず當時此の文を負ひて人の門下に走れば、誰か與に詳解して之を知る有らんや。）と記す。またこの後も、「苦渋」とは程遠い作風の持ち主であり、同時代の陳商に文の難点を非難した韓愈（「答陳商書」、『朱文公校昌黎先生集』巻一八）が、親密な間柄にあった樊宗師に対してはその文の欠点を指摘しなかったことについて、「又不知退之終使宗師之文如是。」（又た知らず退之終に宗師の文を是くの如からしめん。）と言う。孫沖がかような疑問を述べたのは、次節で見るように、彼自身が「絳守居園池記」の一部の読解に成功し、本作品は決して読解が不可能なものではないと知ったことで、中唐の人にとって実はそれ程問題無く読むことのできる文章だったのではないかと疑ったからではないだろうか。樊宗師が「皇唐の名士」であるという考えは、自身がその作品を難解だと感じるという事実以上に、孫沖の頭の中を占める大きな認識だったのだと思われる。

三　「爲宗師筆紀處所者歷歷可見」
―孫沖の「絳守居園池記」解釈の方法―

当初「絳守居園池記」を全く読むことのできなかった孫沖であるが、後に通判として絳州に赴任した際、三つの方法を用いることで、読解作業を進めることができた。

一つ目は、文中に描写される事物を、自身が実際に目にした物と対照することである。孫沖は、「『記』の解し易き者」として「西南有門曰虎豹。」（西南に門有り虎豹と曰ふ。）の部分を挙げ、次のように解説を施す[11]。

其門猶在。左畫虎鼓怒扶力、呀而人立。所謂萬力千氣。彘伏地、雹火雷風、黑山。右胡人鬚、黃■（怨の上部分＋巾）纍珠、丹碧錦襖、身刀、囊韡撾縚。悉如記。白豹玄斑焉、皆非故物也。亦後來好事者圖之。

其の門猶ほ在り。左には虎　鼓怒扶力し、呀して人のごとく立つを畫く。所謂萬力千氣なり。彘　地に伏し、雹火雷風、黑山あり。右には胡人　鬚として、黃■（怨の上部分＋巾）纍珠、丹碧の錦襖あり、身に刀ありて、囊韡撾縚あり。悉く記の如し。白豹の玄斑は、皆　故物に非ざるなり。亦た後來の好事の者之を圖(えが)くならん。

解説を施された「絳守居園池記」の原文は以下のようである（文字は『山右石刻叢編』巻一一所収のものに、句読は『全唐文』（中華書局、一九八三年十一月第一版）巻七三〇所収のものに拠る。以下同じ。）。

西南有門曰虎豹。左畫虎搏立。萬力千氣。氐發彘匿地。努肩腦。口牙快。抗雹火雷風。黑山震將合。右胡人鬚。黃■（怨の上部分＋巾）纍珠。丹碧錦襖。身刀。囊韡撾縚。白豹玄斑。飫距掌胛。意相得。

門の左側に描かれた虎の絵と、右側に描かれた異民族の絵について、孫沖は「悉く記の如し」と述べる。記に描かれた絵の様子が、実物を見るとまさにその通りであったことを言っているのであるが、この場合は、樊宗師の文章が現実を忠実に捉えていることの指摘にもなっている。一方で、黒ぶちの白豹の絵に関しては、全て中唐当時の物ではないとし、後世の物好きな人が描いたのだろうと言う。孫沖がそのように考えた理由は分からない。おそらく、豹の絵の様子について言っているであろう「飫距掌胛。意相得。」の部分が、実際の絵を見てもどうしても理解できなかったからか、あるいは絵を目にする前からすでに文の意味は取れていて、それが実際の絵の内容と一致しなかったからではないだろうか。いずれにしても、「絳守居園池記」は現実を忠実に写し取っているはずだという、樊宗師の文章に対する孫沖の信頼がここから窺える。

「絳守居園池記」の原文と比較すると、孫沖の解説の文章には、虎と「彘（＝豚）」の絵に関する部分に若干の書き換えが見られる。すなわち、虎の絵に関する原文の「搏立。」「努肩腦。口牙快。」を、孫沖は「鼓怒扶力、呀而人立。」と言い換え、「彘」の絵に関する原文の「匿地」を孫沖は「伏地」と文字を置き換えている。かつて川合康三氏は、中唐ではその「苦渋」を指摘されつつも、模倣者を従える程受け入れられていた樊宗師の文章が、宋代ではただ難読さを嘆かれるだけとなった理由について、二つの時代の文学言語の間にずれが生じていたからではないかと推測した[12]。川合氏の推測が正しいとする

ならば、右のような書き換えが、その具体例となるかもしれない。ただし注意せねばならないのは、孫沖が解釈の拠り所とした絵は、あくまで彼が樊宗師当時の物と考えただけだということである。つまり、孫沖の解釈が正しいかどうかは、全て絵に対する彼の見方が正しいかどうかにかかっているのである。例えば、「絳守居園池記」原文の「努肩腦。口牙快。」を、孫沖は虎の絵に関する記述と見、前文の「搏立。」と合わせて書き換えを行ったが、この二句は元々「彘」の絵に関する記述の後に置かれていたものである。したがって、「努肩腦。口牙快。」と描写されるべき「彘」の絵が、本来は別に存在したかもしれないということを我々は念頭に置く必要がある。

孫沖が採った二つ目の方法は、「重刊絳守居園池記序」に

又曰、「考其室亭沼池之增、蓋豪王才侯襲以奇意相勝。至今過客尚往往指可創起處。」如此不過數處、俾人再三讀之、可曉□理。

又た曰く、「其の室亭沼池の增すを考ふるに、蓋し豪王才侯襲(かさ)ねて奇意を以て相ひ勝らんとせん。今に至るまで過客尚ほ往往　創起すべき處を指す」と。此くの如きは數處に過ぎず、人をして再三之を讀ましむれば、□理を曉るべし。

とあるように、文を繰り返し読むことである。「絳守居園池記」の原文

考其臺亭沼池之增。蓋豪王才侯襲以奇異相勝。至今過客尚往往有指可創起處。

と比較すると、異同は一句目で「臺」字が「室」字に変わり、三句目で「有」字が無くなっている二点だけである。このことから、一つ目の方法によって読解が行われた文に比べ、これは文章そのものが孫沖にとって理解し易かったのだと分かる（前節で引いた「與晉守何亮書」に「凡そ能く通ずる者、數句に過ぎず。」とあったのは、この二つ目の方法によって理解できた箇所を指すと思われる。）。

最後の方法は、読解に役立つ資料を探すというものである。

如曰「水本於正平軌」、正平、帶郭縣也。隋開皇十三年、内軍將軍梁軌爲臨汾令。臨汾、卽正平也。十八年改正平也。軌、字世謨、材令也。患州民井滷、生物瘠瘦、因鑿山原、自北三十里引古水。『圖經』云「鼓堆水」。地缺絶、經濠坎、則續之以槽。穿城墉、入衙注池。別分走街巷阡陌、汩汩然鳴、激溉渠、又漑灌畦町、訖入於汾河。其文多如此類、故欲使人昏迷、往往莫辯其理。頃縣前有梁軌遺記、熟見其蹟、則知「水本於正平軌」、由此而發語也。餘無遺據、則皆莫

能知。

「水　正平の軌に本づく」と曰ふが如きは、正平、帶郭の縣なり。隋の開皇十三年、内軍將軍梁軌　臨汾令と爲る。臨汾は、卽ち正平なり。十八年　正平に改むるなり。軌、字は世謨、材令なり。州民の井滷として、生物瘠瘦(よ)たるを患へ、因りて山原を鑿ち、北三十里自り古水を引く。『圖經』に「鼓堆水」と云ふ。地　缺絶し、濠坎を經れば、則ち之に續ぐに槽を以てす。城墉を穿ち、衙に入らしめて池に注ぐ。別に分かれて街巷阡陌を走り、汩汩然として鳴り、激しく渠に溉たりて、又た畦町に漑灌し、訖(つひ)に汾河に入らしむ。其の文此くの如き類多く、故に人をして昏迷し、往往其の理を辯ずる莫からしめんと欲す。頃(このゝ)縣の前に梁軌の遺記有り、熟つら其の蹟を見れば、則ち「水　正平の軌に本づく」は、此れに由りて語を發するを知るなり。餘は遺據無ければ、則ち皆能く知る莫し。

孫沖は、絳州正平県で手に入れた隋の将軍梁軌の事績が書かれた遺文を手掛かりに、「水本於正平軌」という句の意味や、梁軌が行った灌漑事業に関する記述の内容を明らかにした。上の解釈の文と

如原隰隄谿壑水引古。自源三十里。鑿高槽。絶竇墉。爲池溝沼渠瀑潨。潺衆。出汩汩街巷畦町阡陌間。入汾。……水本於正平軌。病井滷生物瘠。引古沃澣。

という「絳守居園池記」の原文との違いの大きさを見て分かるように、孫沖にとってこの箇所は殊に難読であった。遺文が普通に理解できるものであった分、「絳守居園池記」の読みにくさはより強く感じられたであろう。

前節で述べたように、「絳守居園池記」は元々中唐の人にとって問題無く読むことのできる文章だったのではないかと孫沖は疑っていた。しかしながら同時に彼は、樊宗師が「故に人をして昏迷し、往往其の理を辯ずる莫からしめんと欲」して本作品を作ったとも考えていたようである。ただ、遺文を手掛かりとするこの読解方法は、記述の拠り所を見付けるという点で、景物の描写を実物と対照する一つ目のやり方と類似しており、少なくとも内容に関しては、孫沖はでたらめだとは考えていなかったようである。

以上に述べた三つの方法のうち、文を繰り返し読むという二つ目のやり方は、おそらく「絳守居園池記」を手に入れた当初から用いていたであろうし、それによって理解できる箇所はごく僅かだということは孫沖自身も述べているため、さほど注目すべきものではない。重要なのは一つ目と三つ目の方法で、いずれも彼が実際に絳州の地を訪れたことではじめて可能となった。「重刊絳守居園池記序」には次のように記されている。

咸平六年七月、沖奉詔爲絳州通判。……及遊覧園池、考其亭臺、池塘、渠竇、花木、隄原、川河、井閭、牆墉、門戸、凡爲宗師筆紀處所者、雖與舊多徙移、然歴歴可見。

咸平六年七月、沖　詔を奉りて絳州通判と爲る。……園池を遊覧し、其の亭臺、池塘、渠竇、花木、隄原、川河、井閭、牆墉、門戸を考ふるに及び、凡そ宗師に筆紀せらるる處所は、舊と多く徙移すと雖も、然れども歴歴として見るべし。

孫沖は、絳州長官の邸宅にある庭園を見物した際、そこにあるあずまややうてな、池、水路、花や木々、土手、川、井戸、垣根、門戸等が、「絳守居園池記」に描かれるままに存在することに気が付いた。むろん、樊宗師の時代との二百年近い隔たりによって、その多くは失われたり、名前が変わっていたりはした。だが、たとえ「猶視其文未能過半。」（猶ほ其の文未だ過半を能くせざるを視る。）ような状態だったとしても、この発見は極めて大きかったに違いない。「重刊絳守居園池記序」は、孫沖が発見したこの新たな読解手段を示すことに主眼が置かれて書かれたと言えるのである。

四　「紹述之文其必有据」
―北宋における「絳守居園池記」の受容―

周知の通り、北宋は中唐の古文家に対する再評価がなされた時代である。特に韓愈は、次に挙げるように、少なくとも三十五種類の文集が編纂された[13]。

柳開本　銭思公家本　蔡斉本　**晏殊本**　宋綬本　**宋庠（宋祁）本**　祥符杭本　**劉燁本**　秘閣本　**欧陽修校理本**　蘇頌本　**張載本**　嘉祐蜀本　**呂夏卿本**　呂大防本　黄庭堅校本　張耒校本　**陳師道編校本**　紹聖本　鮑由校本　北宋監本　**曾肇本**　沈晦校本　**洪興祖本**　朱台符本　穆修本　王洙本　尹洙本　韓絳本　周敦頤本　曾鞏本　**魏泰本**　京本　孫朴本　**趙子櫟『韓文年譜』**

太字にしたのは、校語や注釈、評論、句読が施されていたことが分かるものである。「絳守居園池記」の再刻や、孫沖による本作品の読解の試みもまた、こうした当時の流れの中に位置付けられるのではないだろうか。

第二節で引いた「重刊絳守居園池記序」の冒頭には、「□在京師得此文、頗與同人商搉」（□　京師に在りて此の文を得、頗る同人と商搉す）と、孫沖及び彼の同人たちが「絳守居園池記」の読解を試みたことが書かれていたが、この他樊宗師の文章が北宋文人の鑑賞の対象となっていたことが分かる資料に、晏殊（九九一～一〇五五）「与富監丞書」がある[14]。

去歳連得郵中書、幷劉夢得、崔巨、樊宗師諸石記、

尤慰。……宗師之作乃好古之過矣。安有是哉。安有是哉。

去歳連（しき）りに郵中の書、幷びに劉夢得、崔巨、樊宗師の諸石記を得、尤も慰めらる。……宗師の作は乃ち古を好むの過ぐるなり。安くんぞ是れ有らんや。安くんぞ是れ有らんや。

娘婿の富弼（一〇〇四～一〇八三）が石に刻まれた劉禹錫、崔巨、樊宗師の「記」を送ってくれたことに対して礼を述べる。樊宗師の「記」は具体的な作品名が書かれていないが、北宋における彼の作品の残存状況や、富弼が景祐二年から三年（一〇三五～一〇三六）にかけて絳州通判を務めた際、絳守居園池内で嵩巫亭の建造と勧徳堂の増修を行っている[15]こと等から、「絳守居園池記」である可能性が高い。副島一郎氏によると、晏殊は西崑派の代表的人物の一人と見られることがあるが、実際は古文の復興にも大きな役割を果たし、特に慶暦四年（一〇四四）以降は、経書や韓愈、柳宗元の古文を耽読したという[16]。ただ、樊宗師の作品は古代への愛好心が過度に表れていると非難する右の記述を見ると、晏殊にとっても「絳守居園池記」は、やはり難読の文章であったらしい。

『文献通考』巻二三三「経籍考」集・別集には、

陳氏曰、……〔韓〕退之作樊墓志、稱「其爲文不剽襲」。觀「絳守居園池記」、誠亦太奇澁矣。本朝王晟、劉忱皆爲之註解。

陳氏曰く、……退之　樊の墓志を作り、「其れ文を爲（つく）るに剽襲せず」と稱す。「絳守居園池記」を觀るに、誠に亦た太（はなは）だ奇澁なり。本朝の王晟、劉忱　皆之が註解を爲す。

と、「絳守居園池記」に注釈を施した人物について述べた陳振孫のことばが引かれる（ただし、現存する『直斎書録解題』にこの記述は見られない。）。劉忱については詳細は不明だが、王晟に関しては、『直斎書録解題』巻一六「別集類上」に記載がある。

〔『樊宗師集』一巻、『絳守園池記注』一巻〕唐諫議大夫南陽樊宗師紹述撰。韓文公爲墓誌、稱『魁紀公』三十卷、『樊子』三十卷、詩文千餘篇。今所存纔數篇耳。讀之殆不可句。有王晟者、天聖中爲絳倅、取其「園池記」、章解而句釋之、猶有不盡通者。

唐諫議大夫南陽樊宗師紹述撰。韓文公　墓誌を爲（つく）り、『魁紀公』三十卷、『樊子』三十卷、詩文千餘篇と稱す。今存する所纔かに數篇のみ。之を讀むに殆ど句すべからず。王晟なる者有り、天聖中　絳の倅と爲り、其の「園池記」を取りて、章解して之を句釋するも、猶ほ盡くは通ぜざる者有り。

王晟もまた孫沖同様、天聖年間（一〇二三～一〇三二）に絳州の通判となった際、「絳守居園池記」に注釈を施した。注そのものが残っていない以上あくまで想像に過ぎないが、王晟は当地にあった孫沖の「重刊絳守居園池記序」を見て、自らも注釈を施すことを思い立ったのでないだろうか。天聖は、孫沖が「重刊絳守居園池記序」を書いた景徳元年（一〇〇四）から二十年程しか経っておらず、まだ本序文を刻んだ石は残っていたと思われる。

また、欧陽脩「絳守居園池」詩（『居士集』巻二、『欧陽文忠公集』巻二、全二十四句）も、彼が実際に絳州に立ち寄った際に作られたものである[17]。最初の八句で、樊宗師が文章を作る際に前人のことばを踏襲しなかったこと、「絳守居園池記」が『尚書』の句読を真似た難読な作品であることを述べた後、次のようにうたう。

9荒煙古木蔚遺墟　荒煙古木　蔚たる遺墟
10我來嗟秖得其餘　我來たりて嗟く秖だ其の餘を得るのみなるを
11柏槐端莊偉丈夫　柏槐　端莊たる偉丈夫
12蒼顏鬱鬱老不枯　蒼顏　鬱鬱として老ゆるも枯ちず
13靚容新麗一何姝　靚容　新麗にして一に何ぞ姝たる
14清池翠蓋擁紅葉　清池に翠蓋　紅葉を擁く
15胡鬚虎搏豈足道　胡鬚虎搏豈に道ふに足らんや
16記錄細碎何區區　記錄　細碎として何ぞ區區たる

欧陽脩は孫沖同様、「絳守居園池記」に描写される事物を自身が実際に庭園で目にした物と対照している[18]。第十句の「我來たりて嗟く秖だ其の餘を得るのみなるを」は、庭園が廃墟と化したこと自体を嘆く気持ちとともに、「絳守居園池記」を読み解くのに必要な実際の風景や事物の多くが、すでに失われてしまったことを残念に思う気持ちを表している。欧陽脩から見て樊宗師の景物の描写は、細々しいまでに詳細な「記錄」であった。「絳守居園池」詩は、欧陽脩が「絳守居園池記」の難解さを非難した作として取り上げられることが多いが、筆者がかつて指摘したように、後半部分は樊宗師が敢えて読みにくい文章を作った理由について一定の理解を示す内容となっている[19]。欧陽脩にとって「絳守居園池記」は、樊宗師が意図して作った難読の文章であると同時に、現実と対照することで「読めるはず」の文章でもあったのである。

さらに司馬光（一〇一九～一〇八六）も、絳州を訪れた際に作った文の中で「絳守居園池記」に触れている[20]。

鼓堆在州治所西北二十五里。樊紹述「守居記」作「古」、州之『圖志』作「鼓」。鼓者、人馬踐之、逢逢如鼓狀。蓋水原充滿石下而然云。紹述之文、其必有据。然今以耳目驗之、則『圖志』亦未可全廢也。……嘉祐元年（一〇五六）九月壬寅（二十三日）、通判幷州事司馬光以事至絳。

鼓堆　州の治所の西北二十五里に在り。樊紹述の「守居記」「古」に作り、州の『圖志』「鼓」に作る。鼓は、人馬之を踐めば、逢逢たること鼓の狀の如ければなり。蓋し水原　石の下に充滿して然云はん。紹述の文、其れ必ず据る有らん。然れども今　耳目を以て之を驗せば、則ち『圖志』も亦た未だ全くは廢すべからざるなり。……嘉祐元年九月壬寅、通判幷州事司馬光　事を以て絳に至る。

司馬光は丘（堆）の名称について、「古堆」に作る「絳守居園池記」には、きっと拠り所があったはずだと言う。また「鼓堆」に作る絳州の『図志』についても、現地の様子からそのように作る理由を推測し、全く捨て去ってよいものではないとする。ここから、樊宗師の文章の内容は信頼するに足るという司馬光の評価とともに、ことばと現実との一致を重んじる彼の姿勢が窺える。そしてその「現実」は、「絳守居園池記」については中唐における現実、『図志』については北宋における現実と、それぞれ分けることができる。たとえ時代を異にしてはいても、各々の現実に依拠して作られている限り、資料としての価値があるのだと司馬光は考えていた。『資治通鑑』執筆の際に彼が行った厳密な資料の取捨選択は、こうした考えを反映したものだと言える。

以上に取り上げた注釈や作品は、全て孫沖の「重刊絳守居園池記序」よりも後に作られたものである。現存する資料からは、それぞれの作者が本序文を読んでいたかどうかは分からない。むしろ、先に見た『文献通考』に引く陳振孫の「本朝の王晟、劉忱　皆之が註解を爲す。」ということばからすると、孫沖の注釈は多くの作者の目には触れていなかったと思われる。だが逆に、直接的な影響関係が無いからこそ、記述の中身と実際の風景とを対照させるという孫沖と欧陽脩の読解方法や、「古堆」の名称に拠り所があるとする司馬光の記載の裏に、ことばと現実との対応を重んじる北宋人の共通の思考が透けて見える。

筆者が調査した限りでは、本稿で取り上げた人物を含め、「絳守居園池記」の文辞にまで肯定的な評価を与える北宋文人はいなかった。中唐とは違い、北宋では、樊宗師の文章は鑑賞の対象にはなっても、模倣の対象とはならなかったのである。またその鑑賞にしても、中唐古文家の見直しという当時の流れの中で行われた行為ではあるけれども、韓愈、柳宗元等に比べると、作者の樊宗師に対する評価はやはり低いと言わねばならず、韓愈が称揚していたために多少注目を集めたというのが実際のところであろう。さらに注釈についても、他人が読めないものを自分が読んでみせるという注釈者の虚栄心が動機とも考えられるし、絳州を訪れたのをきっかけに、彼の地に縁のある人物、作品を顕彰する目的で読解を行った

可能性や、自身の学者としての実績作りということも考えられる。ただそれでもなお、晩唐、五代の間にほとんど顧みられなくなっていた樊宗師の文章が、北宋に入って再び取り上げられるようになったのは、やはり意味のあることである。中唐において「苦渋」を尊ばれた樊宗師の文章は、「苦渋」であるが故に、わずかながら作品を後生に残すことができたのだと言えよう。

おわりに

川合康三氏は、ある時代の文学が前代の文学を継承する場合、その時代自身の要求に適った部分が受容されると述べた[21]。宋代の古文家による「絳守居園池記」の受容の在り方は、これに当てはまる部分がある。秦観（一〇四九～一一〇〇）が、「韓愈論」（『淮海集』巻二二）の中で「文」の一つとして「叙事之文」を挙げ、「考同異、次舊聞、不虚美、不隠惡、人以爲實錄。」（同異を考へ、舊聞を次で、虚しく美せず、惡を隠さず、人以て實錄と爲す。）と記す[22]ように、ことばと現実の一致に対する尊重は、宋代古文の特徴の一つである。浅見洋二氏がかつて論じたように、宋代には詩についても同様の主張が見られる[23]。ただし、古文における議論が詩と異なるのは、現実を忠実に写し取った文章を読んだ時、宋人はそこに美を見出すよりも、多くは史料的側面に目を向けるということである。本稿で示した例で言えば、景物の描写が詳細な「絳守居園池記」を欧陽脩が「記録」と呼び、丘の名称の今と昔における違いを述べる際、司馬光が「絳守居園池記」の記述との比較に絳州の地理書である『図志』を持ち出したのがまさにそうである。おそらく文は詩と違い、一句の字数や音律等の規則が無く、対象をあるがままに写し取ることが比較的容易であるため、記述の内容やその信憑性に評価の目が向けられやすいからであろう。また、古文がしばしば歴史に関係する作品の中で作られることも、理由の一つと考えられる。

ところで孫沖は、韓愈以降の古文の衰退と、同時に現れた弊害について述べた際、「今則尤甚。」（今は則ち尤も甚し。）と述べ、宋代の古文の有様を最も深刻視した。祝尚書氏によれば、これは当時柳開を中心とする一派が、晦渋古怪な文章を作っていたことを指すという[24]。祝氏は、前漢の揚雄が『易経』や『論語』を模して『太玄経』や『法言』を著したように、宋初には古代の文章を真似て作文することが流行っていたと言い、実際に柳開の文章を例に、それが『法言』の文章を模擬、あるいは剽窃して作られたものであることを具体的に示した。後世、道学家の先駆けと看做されるようになる柳開の文章が、儒家の道の鼓吹に力を注ぐあまり、抽象的な議論に中身が偏り、当時の読者に晦渋だと受け取られていたとしても不思議はない。いずれも難解、難読という点では一致する柳開、樊宗師の文章に対する孫沖の評価であるが、前者が現実とかけ離れた抽象論に陥っていることを単に

非難されただけなのに対し、後者は注釈という形で読解が試みられている。かかる相異は、単純に言えば、各作品の作者が前代の人物であるか、同時代人であるかによる。現代人の文学観からすれば、いずれの文章も決して評価に値するものではない。北宋人にとっても、それは同じことだったと思われるが、単純に「苦渋」「怪奇」といった評語によって全てを否定し去らなかったところに、こうした問題の難しさがある。

注

[1] 樊宗師の生没年については諸説あるが、本稿では『中国文学家大辞典』唐五代巻（周祖謨主編、中華書局、一九九二年九月第一版）に拠った。

[2] 増補津逮秘書本に拠る。

[3] 「樊紹述既卒、且葬、（韓）愈將銘之、從其家求書。得書號『魁紀公』者三十卷、曰『樊子』者又三十卷、『春秋集傳』十五卷、表牋、狀策、書序、傳記、紀誌、說論、今文讃銘凡二百九十一篇、道路所遇及器物門里雜銘二百二十、賦十、詩七百一十九。曰、『多矣哉。古未嘗有也。』（樊紹述既に卒し、且に葬らんとし、愈將に之を銘せんとして、其の家に從ひて書を求む。書『魁紀公』と號づくる者三十卷、『樊子』と曰ふ者又た三十卷、『春秋集傳』十五卷、表牋、狀策、書序、傳記、紀誌、說論、今文の讃銘凡そ二百九十一篇、道路に遇ふ所及び器物門里の雜銘二百二十、賦十、詩七百一十九を得。曰く、「多きかな。古未だ嘗て有らざるなり」と。）

[4] 以下、欧陽脩の作品の引用は全て四部叢刊本に拠る。

[5] 現代における「絳守居園池記」の注釈、翻訳の成果としては、趙鳴、張潔『絳守居園池記』釈義」（『中国園林』十六、二〇〇〇）や彭小楽「『絳守居園池記』校注」（華中科技大学碩士学位論文、二〇〇九）がある。なお、歴代の文人や学者による注釈や句読の成果については、彭小楽氏論文1・1研究現状の他、『岑仲勉史学論文集』（中華書局、一九九〇）を参照した。

[6] 黄啓方『両宋文史論叢』（中国文史論著叢編（2）、学海出版社、中華民国七十四年十月初版）「蘇舜欽的家世与交遊」参、交遊 十八、孫沖参照。

[7] 「（七月）庚寅（十四日）、右諫議大夫、集賢院學士孫沖上所撰『五代紀』七十七卷。（上）降詔褒答。」（庚寅、右諫議大夫、集賢院學士孫沖撰する所の『五代紀』七十七卷を上る。詔を降して褒答す。）また、『玉海』巻四七「芸文」編年・景祐五朝春秋にも同様の文が見える。

[8] 「宋初的易学者与古文家―従陳摶到馮元」（王水照主編日本宋学研究六人集『気与士風―唐宋古文的進程与背景』、王宜瑗訳、世紀出版集団、上海古籍出版社、二〇〇五年八月第一版）三、対太宗、真宗的『易』的進講参照。

[9] ただし、柳開から古文を学んだ高弁（生没年不詳）が、若い頃終南山で神放について学んでいたこともあった（『宋史』巻四三二「儒林伝二」）ように、柳開一派と神放等との繋がりが無い訳ではない。

[10] 『広川書跋』巻八・園池記別本には、著者の董逌が絳州を

訪れた際に、「絳守居園池記」の古い碑文の裏に樊宗師による自注が刻まれているのを発見したことが書かれている。

[11]『記』の解し易き者」は、あるいは文章自体の分かり易さを述べたことばと見る人もあるかもしれない。だが、この直前に、あずまやや堤、原、水路、花や木々等の多くが往時の姿や名を留めていないために、「絳守居園池記」の内容の正しさを確かめようがないことを嘆じた記述があることを考えれば、やはりここは、門が「猶ほ在」ることによって、記の内容が容易に理解できるという意味に取るべきであろう。

[12]「奇―中唐における文学言語の規範の逸脱―」(『終南山の変容―中唐文学論集』、研文出版、一九九九年十月一日第一版第一刷発行)四　韓門の奇参照。

[13]『韓愈集宋元伝本研究』(唐研究基金会叢書、劉真倫著、中国社会科学出版社、二〇〇四年六月第一版)第一編　集本、中下編　已佚集本(上下)参照。

[14]『全宋文』巻三九八(曾棗荘、劉琳主編、上海辞書出版社、安徽教育出版社、二〇〇六年八月第一版、拠『国朝二百家名賢文粋』巻一〇二)に拠る。

[15]『宋人年譜叢刊』(全十二冊、呉洪沢、尹波主編、四川大学出版社、二〇〇三年一月第一版)第二冊、曹清華「富弼年譜」参照。

[16]「宋代古文史上における晏殊」(『橄欖』第十四号、二〇〇七)「与富監丞書」に見る晏殊の古文批評、晏殊の古文批評と門下生たち参照。

[17]南宋・胡柯「廬陵欧陽文忠公年譜」慶暦四年甲申(一〇四四)の条に「(四月)己亥(八日)、命公使河東、計度廢麟州及盗鑄鐵錢幷礬課虧額利害。七月、還京師。」(己亥、公に命じて河東に使ひし、麟州を廢すること及び鑄鐵錢幷びに礬課(ばんくわ)を盗まるる虧額の利害を計度(けいたく)せしむ。七月、京師に還る。)とあり、本詩はこの河東視察の道中に詠まれたものと思われる。

[18]詩の内容と対応する「絳守居園池記」原文は、第三節で引用した「西南有門曰虎豹。」以下の部分及び「東南有亭曰新。前含曰槐。有槐。扙護■(雨+對)鬱。蔭後頤。……又東騫窮角池。研雲曰柏。有柏蒼官青士擁列。與槐朋友。巉陰洽色。」の部分である。

[19]「理念の無い『怪奇』―太学体排斥の理由について―」(『中国中世文学研究』第七十号、二〇一七年十月)。また本稿の「はじめに」で引用した『集古録跋尾』の記述も、単なる否定のことばではないことも、この論文の中で述べた。

[20]「題絳州鼓堆祠記」(四部叢刊本『温国文正司馬公文集』巻六六)

[21]前掲注[9]書同箇所参照。

[22]四部叢刊本に拠る。

[23]『中国の詩学認識―中世から近世への転換―』(創文社、二〇〇八年二月二十八日第一刷発行)第三部　詩と現実、第一章　距離と想像―詩とメディア、メディアとしての詩、五　距離と想像、第二章　「形似」の変容―言葉と物の関係から見た宋詩の日常性、三　詩と現実、四　言葉と物等参照。

[24]『北宋古文運動発展史』(北京大学出版社、二〇一二年二月第一版)第一、二章　宋初古文:由方興到失敗(上、下)参照。

日本学術振興会特別研究員DC(広島大学大学院文学研究科)
本研究はJSPS科研費17J03014の助成を受けたものです。